

2023（令和5）年度 音楽鑑賞教育振興 助成研究募集 入選研究計画論文

2023（令和5）年度 音楽鑑賞教育振興 助成研究募集では、鑑賞領域の学びを中心とした音楽科教育に資する実践的な研究計画を募集し、右記の通り入選者を決定しました。入選者には2年間の研究に取り組んでいただきます。

《2023年度 実施概要》

○募集テーマ

鑑賞領域の学びを中心とした、音楽科教育に資する実践的な研究

○応募状況と入選数

応募数：1件 入選数：1件

○審査基準

次の①から④までを満たす研究計画である。

- ① 鑑賞領域の学びを中心としている
- ② これからの音楽科教育に資する内容である
- ③ 授業実践による検証を伴った研究である
- ④ 研究の成果が、音楽科教育において広く普及することが見通せるものである

○選考委員

河野正幸 聖徳大学名誉教授
嶋 英治 元福島大学特任教授
辻村哲夫 選考委員長／元文部省初等中等教育局局長
／公益財団法人音楽鑑賞振興財団常務理事

○選考専門委員

加藤富美子 東京音楽大学客員教授
津田正之 国立音楽大学教授／全日本音楽教育研究会
常任理事
藤沢章彦 元国立音楽大学教授／公益財団法人音楽鑑賞振興財団理事

○後援

全国都道府県教育長協議会
全日本音楽教育研究会
全国連合小学校長会
全日本中学校長会
全国高等学校長協会
一般財団法人日本私学教育研究所

○主催

公益財団法人音楽鑑賞振興財団

入選者	〈グループ研究〉 茨城県 ミュージックエデュケーションメッセ 代表：山田 聡
研究テーマ	音楽鑑賞における個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の研究 ～自ら探究的に鑑賞する児童生徒の育成を目指して～
助成金額	500,000 円

(研究助成金額は、研究計画書とともに提出された予算書に基づき、選考委員会において決定しました。)

ご挨拶

世界には長く人々に親しまれ、後世に伝えていきたい音楽が数多くあります。

では子供たちが日々接する音楽は…となると、生活の中で何気なく耳にする音楽ということになるでしょう。子供たちは教えられなければ気付かないのです。これは彼らの人生にとって残念なことであり、ひいては世界の音楽文化の伝承に禍根を残すことにもなります。

音楽鑑賞の授業で様々な音楽を知ることによって子供たちの音楽の世界は開けていきます。その音楽にかけた作曲家たちの思い、曲想や音楽の構造などを知りその音楽についての理解を深めることで、子供たちは生き方を豊かにする鑑賞力を身に付けていきます。

今年度助成が決定された研究には、何とかして子供たちに音楽への興味関心を高めたい、音楽を愛好する心を育てたい、そのためにどのような指導の工夫が必要か、先生たちの熱意が伝わってきました。研究の成果を期待しています。

(選考委員長：辻村哲夫)

選 評

今回の応募は、1件のみでしたが、慎重な審査の結果入選となりました。入選された計画は、現在大きな課題として挙げられている「個別最適な学び」と「協働的な学び」、および「その一体的な充実」に焦点をあて、一人一台端末を活用して、その有効な授業実践を研究するというものです。また、副題の「探究的な学習」も今日求められる学習態度です。

現在、一人一台の端末は広くゆき渡り、この有効活用について全国の学校で試行錯誤が続いています。「使ってみる」からのスタートの時期を少し過ぎて、どんな時に、どんな使い方をすると効果的かが問われるようになってきました。こうした中で学習指導の重要な課題に対して、音楽鑑賞の授業における進め方を研究することは、多くの先生方の参考になると思われます。

なお、今後応募いただく研究計画ですが、研究の内容が重要かつ大きなテーマであればあるほど、取り組みが多様に考えられるため、具体的な試行や改善の間口が広く大きくなってしまいが考えられます。この選評でもたびたび書いていることですが、もう少し焦点を絞って、例えば、児童生徒の実態や能力の把握の仕方、それを踏まえての指導計画、発問、助言の工夫というようなテーマ、あるいは端末タブレットの2～3つの使い方を試行錯誤し、工夫してわかりやすい学習や評価に結び付けるというような研究も大切です。そうした日常的で身近に感じた疑問や課題をテーマにした研究も、ぜひ応募していただけるとよいと思います。

(選考専門委員チーフ：藤沢章彦)

● 入選

<研究テーマ>

音楽鑑賞における 個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実の研究 ～自ら探究的に鑑賞する児童生徒の育成を目指して～

研究グループ：ミュージック エデュケーション メッセ

研究グループ代表：山田聡（つくば市教育委員会）（写真）

磯幸子（水戸市立国田義務教育学校）他
「いばみゅう」（茨城県内に勤務する

小・中学校教諭より構成）

※所属は入選時点（2023年12月）のもの



68

1. 研究テーマ設定の趣旨

本研究では、探究的に鑑賞することができる児童生徒の育成を目指して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ることを目的とした研究である。

このことを研究テーマにした理由は、これからグローバル化や情報化が急激に進展する社会において、児童生徒が予測できない未来に対応していくためである。児童生徒の学びのスタイルとして、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、鑑賞の授業においても、授業改善を進めることで、自ら探究的に鑑賞する児童生徒を育成していくことが重要であると考えたからである。

● 「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」とは

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」については、「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの

一体的な充実に関する参考資料（令和3年3月版）」の中で、「実際の学校における授業づくりには、『個別最適な学び』と『協働的な学び』の要素が組み合わさって実現されていくことが多いと考えられます。例えば授業の中で『個別最適な学び』の成果を『協働的な学び』に生かし、更にその成果を『個別最適な学び』に還元するなど、『個別最適な学び』と『協働的な学び』を一体的に充実していくことが大切です」と書かれている。

しかし、音楽鑑賞の学習において、「個別最適な学び」とはどのようなものか、「協働的な学び」とはどのようなものか、その指導法は試行錯誤が続いているのが現状である。「個別最適な学び」は、単に児童生徒が一人一台端末を活用すればよいわけではなく、「協働的な学び」についても個々の意見を大きなモニターに映し出して共有すればよいわけではない。児童生徒の資質・能力育成のため、各教科等の特質に応じ、地域・

学校や児童生徒の実情を踏まえながら、「学び」の充実に効果を上げているかを確認することが必要である。このことを通じて、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげ、学習指導要領前文に記載されている「一人一人の児童（生徒）が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう」に育成していくことが求められている。

このようなことから、本研究では、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図り、児童生徒が鑑賞の授業において、自ら進んで何度も聴いたり、友達と話し合って意見を交わしたりしながら、探究的に鑑賞していく児童生徒を育成していきたいと考えている。

2. 研究内容

本研究の主題「個別最適な学びと協働的な学びとの一体的な充実」について、主に以下の指導の方策を研究内容として設定する。

(1) 「個別最適な学び」を実現するための方策

鑑賞の授業において、関心の高い児童生徒、または関心の低い児童生徒への支援の手立てにはどのようなものがあるのか。また、一人一台端末を活用することで、児童生徒がどのような学習の深まりや広がりをもつことができるのかを研究し、検証していきたい。

とくに関心の高い児童生徒が端末を活用することで、どのような発展的な学習を進められ、自ら楽曲を調べたり、まとめたりすることができるのかについても検証していく。また関心の低い児童生徒に対しても、楽器の音色について

端末を活用して鑑賞し、それぞれの楽器の音色の特徴を押さえることが端末を導入したことで、進めやすくなってきているので、その点についても検証していく。

「個別最適な学び」を推進することで、これまでの一斉授業中心のいわゆる単線型に近い授業の在り方から、複線型の授業も展開することが可能となってくる。複線型の授業を取り入れることで、児童生徒が自己調整をしながら学習に取り組むことができるのではないかと。

(2) 「協働的な学び」を実現するための方策

一人一台端末の活用により、児童生徒同士、児童生徒と教師、グループでの交流が以前に比べ、効率よくできるようになった。児童生徒の意見や気づきリアルタイムで電子黒板等に可視化されることで、共有がしやすくなった。さらに深い部分まで「協働的な学び」が行えるように、鑑賞の授業において、リアルタイムに児童生徒の考えを交流しあえる場面やその手立て、授業展開について研究していく。

また、音楽科は、音を扱う教科であることから、言語活動による交流に加えて、一人一台端末を活用して、音声、楽譜、映像等も使った協働的な学びの在り方や授業展開について可能性を検討していく。

(3) 「両者の一体的な充実」を実現するための方策

(1)、(2)の学びの往還が十分に図れることで、一体的な充実を目指すことができる。一体的な充実が図られることで、どのような教育的効果があるのか、1時間の授業の中での展開、題材構成を検証していく。

なお、現在学び方として重要とされている「探求的な学び」については、上記の研究の中で十

分配慮した授業実践を行いたいと考えている。

3. 研究方法

本研究では、研究を進める上での目指す児童生徒の姿として次の姿を考えている。

- 小学校：目指す児童の姿
 - ・低学年…興味関心をもち、何度も自ら聴いてみようとする。
聴き取ったことや感じ取ったことをすすんで友達と伝え合うことができる。
 - ・中学年…興味関心をもち、端末等を活用して何度も聴くことを通して音の特徴や奏法についても気付くことができる。
複数の楽器の曲等を比較鑑賞して気付いたことや自分の気に入った楽器の楽曲について理由を添えてまとめ、友達と意見交流することができる。
 - ・高学年…自らすすんで聴いたり、さらに知りたい、聴きたいと思ったところを見つけたりして鑑賞する。
自分の言葉でその曲のよさを友達に伝えることができる。
- 中学校：目指す生徒の姿
 - ・課題をもち、自ら聴いてみようとする。
 - ・聴くだけでなく、楽曲によっては生徒が歌いながら鑑賞し、楽曲をより味わう。(例えば、民謡や長唄といった、伝統的な歌唱など)
 - ・よさや美しさを伝える批評文や紹介文を書くことができる。
 - ・以前比較したものの記述やデジタルによる成果物などをさらに使って聴き深めたり、まとめたりする等のデータ活用をして、鑑賞をすることができる。その楽曲のよさや美しさを感じ取ることができる。相手へ発信することができる。

このような児童生徒の姿の実現を目指して以下のような研究方法で進めていきたい。

(1) 鑑賞の年間指導計画と授業実践

上記の「目指す児童生徒の姿」として、検証に適合している題材や楽曲を選び、指導計画および授業実践計画を立案する。

(2) 小学校、中学校、義務教育学校の3つの校種により実践による、義務教育9年間を見通した題材計画

3つの校種が連携、協力しあうことで、より義務教育9年間の学びを見通すことができる。題材計画も系統性を考え、立案していく。

(3) 研究の効果の検証

授業実践の記録とその分析を中心に研究の効果を以下のような手段で検証していく。

- ①個別最適な学びの活用を取り入れた場合と、そうでない場合(端末が導入される前の鑑賞の授業)の授業展開を比較実践する。個別最適な学びを取り入れることで、題材の最後にどのような変容(曲への興味関心、知覚・感受)が見取れるか、検証していく。
- ②ワークシートや自己評価カード、一人一台端末による発表成果物を用いて行う記述内容の分析：授業中に児童生徒が記述したワークシートや自己評価カード、一人一台端末による発表成果物を用いて、上記の「目指す児童生徒の姿」が見取れるかどうか検証する。
- ③アンケート調査による検証：授業前後にアンケートを取り、題材を通しての学びの深まりや変容を見取る。また、個別最適な学びの時間が鑑賞の学習にあることでの効果的な意見も取り、検証したい。
- ④音声・映像記録での児童生徒の発言や行動分析の記録：授業の様子を動画に撮り、教師の発問や働きかけによる児童生徒の発言や行

動を分析し、変容を見取るための資料とする。

⑤抽出児童生徒の設定、変容の記録および分析：上記の映像による記録を取る際には、あらかじめ抽出する児童生徒を設定し、題材を通して、どのように変容するか記録を取り、授業後の分析から次の授業者の実践に生かせるようにする。

⑥小学校の学級担任、音楽科教諭、中学校の音楽科教諭のそれぞれの教諭による実践と、義務教育学校の音楽科教諭による追試授業による検証：研究メンバーの勤務校種を生かし、小学校、中学校でそれぞれ授業実践する内容を義務教育学校の教員が追試実践する。また、その追試実践を生かし、義務教育学校の教員は、他学年での類似実践や、発展した実践を考え、授業実践を行う。小学校では、学級担任による実践が加わることで、日常的に児童と関わる学級担任が音楽科以外の児童の実態を掴んだ上での授業を構成し、実践することで、とくに低学年など専科教員が関わるのが少ない学年の実態や手立ても検討する。計画の段階で、授業学年を分担したり、同じ題材を違う学校で実践したりして検証して、多くの実践を集め、今後の指導力向上にも生かせるようにする。

⑦中学校および義務教育学校後期課程においては、昨今話題となっている生成 AI を試行し、授業で活用する今後の可能性を検討していく。

①～⑦の検証を進めるために、現段階では以下のような授業を構想し、研究の準備を進めていく。

(小学校)

・ 2年 「トルコ行進曲」(ベートーヴェン)、

「卵の殻をつけたひなどりのパレエ」

- ・ 3年 トランペットとホルンの比較鑑賞
- ・ 4年 フルートとクラリネットの比較鑑賞
- ・ 5年 箏と尺八「春の海」
- ・ 6年 「越天楽今様」

(中学校)

- ・ 2年(8年) オペラ「アイダ」、歌舞伎「勧進帳」→西洋音楽と日本の伝統音楽の比較、「フーガ短調」(テクスチュアを視覚的に捉える)

(その他)

- ・楽譜の電子化、アプリやソフトを使った学習、生成 AI による比較検討。

4. 研究スケジュール

本研究では、2024年度を第1次研究、2025年度を第2次研究として2年間での研究を計画している。

●第1次研究(2024年度)

- ・ 4～6月：各学校における実践と課題の整理、外部講師による指導助言。
生成 AI (チャット GPT など) に関する自主研修。
授業に必要な CD、DVD、書籍等の発注。その必要な備品の発注と整備。
- ・ 7月：秋の公開授業に向けた指導案作成および指導案相談会。
- ・ 8～9月：夏季研修として、外部講師による指導助言。
各市町村での研究発表会や実技研修会での相互報告会の実施。
- ・ 10月：授業実施学年の割り振り、題材や教材の選定と検討を含めた授業者による打ち合わせ。
全国の音楽科研究大会への参加、情報収集(随

時)

- ・11月：第1回研究授業（義務教育学校）に向けたプレ授業のための指導案検討会、研究会参加後の情報共有（オンラインにて）。演奏家の方と連携した、鑑賞教材の準備や音源作成等の第1回打ち合わせ。
- ・12月：第1回研究授業（義務教育学校）に向けたプレ授業実践および振り返り。第2回研究授業（小学校）に向けたプレ授業のための指導案検討会、冬季休業中における「いばみゅう」メンバーによる自主研修会。
- ・1月：第2回研究授業（小学校）に向けたプレ授業実践および振り返り。第3回研究授業（中学校）に向けたプレ授業のための指導案検討会。演奏家の方と連携した、鑑賞教材の準備や音源作成等の第2回打ち合わせ。
- ・2月：第3回研究授業（中学校）に向けたプレ授業実践および振り返り、研究1年目における中間発表と今年度の反省会。
ミュージックエデュケーションメッセでの研修。
- ・3月：次年度へ向けての準備等を含めた「いばみゅう」メンバーによる打ち合わせ。
外部講師による助言②。

●第2次研究（2025年度）

- ・4月：研修計画と準備、授業の再構築。
必要な教材、備品等の最終確認。
- ・5月：指導案作成と検討。指導案検討をチームで分け、義務教育学校、小学校、中学校の3チームに分かれ、複数で協力しあい、検討していく。
- ・6月：外部講師による助言③（作成した指導案について）
- ・7～8月：授業準備（夏季休業を有効に使い、各学校で模擬授業を実施し、相互参観し合い

ながら、指導案の修正を進めていく）

- ・9月：指導案の完成、演奏家の方と連携した鑑賞教材の準備や音源作成等の第3回打ち合わせ。
- ・10月：第1回研究授業（義務教育学校）実践、授業後の反省会。
第2回研究授業（小学校）に向けての準備。
全国の音楽科研究大会への参加、情報収集(随時)
- ・11月：第2回研究授業（小学校）実践、授業後の反省会。
第3回研究授業（中学校）に向けての準備。
外部講師による助言④（研究のまとめに向けて）
- ・12月：第3回研究授業（中学校）実践、授業後の反省会。
第1～3回の研究授業における、成果と課題について整理し、実践のまとめを行う。
- ・1月：報告書提出。

【引用・参考文献】

- ・「令和4年度 第64回関東甲信越音楽教育研究会茨城大会(水戸大会) 報告書」(2022.11月)
- ・「音楽鑑賞教育 Vol.53」(2023. 4月)
- ・「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について」文部科学省国立教育政策研究所(2020年6月)。